

# シェイクスピアの作品における反復表現についての一考察

～シェイクスピアは「三度」がお好き?!～

古庄 信

## Abstract

When we hear or read the words of Shakespeare, we will find that there are some repeated words or phrases, even sometimes sentences, which are very familiar ones to us, such as “*words, words, word,*” (HAM 2.2.192) or “*To be, or not to be... to die, to sleep... to sleep... to dream...*” (HAM 3.1.55-64) In such phrases, the one repeated thrice seems to be more often used than twice or other ones. When the writer reads *Hamlet*, this seems especially true to him. Moreover, we will recognize that these repetitions could be classified into some fixed patterns. We have to consider what influence on this repeated usage, for example, the Bible, or the Greek tragedies, etc. Or should we think what the effects of using these phrases are, when and how. But before that, we shall observe the frequency of each pattern first in this paper, and how many patterns are there in *Hamlet*? “The play’s the thing!”

## 序

シェイクスピア劇のせりふを舞台で耳にしたり、読み返したりした際、各々の作品中でいくつかの有名な反復表現が使用されていることは周知のとおりである。そして、この反復が「二度」や「四度」（あるいはそれ以上）というよりは、むしろ「三度」の反復であることの方が多いように思われる。さらにこれらの反復表現は次のようないくつかのパターンに分類できる。

たとえば、Poloniusの問いに対するHamletの答えやMacbethの独白に見られるような同一語が3回反復される例：

- 1) Polonius. What do you read, my lord?  
Hamlet. *Words, words, words.* (HAM 2.2.192)
- 2) Macbeth. *To-morrow, and to-morrow, and to-morrow...* (MAC 5.5.19)

さらにフレーズやセンテンスが3回反復されている例も見られる。

- 3) Horatio. *If thou hast any sound or use of voice,*  
*Speak to me.*  
*If there be any good thing to be done*  
...  
*Speak to me.*  
*If thou art privy to thy country's fate,*  
...  
*O speak!* (HAM 1.1.128-139)

あるいはひとつの対象を示す3つの異なる語(句)が並べられている例もある。

- 4) Brutus. *Romans, countrymen, and lovers,*... (JC 3.2.13)  
5) Antony. *Friends, Romans, countrymen, lend me your ears...* (JC 3.2.73)

また、「三度」という単語自体を使用しての表現はどうであろうか。

- 6) Horatio. ...*thrice* he walk'd By their oppress'd and fear-surprised eyes  
(HAM 1.2.202)
- 7) Casca. And then he offer'd it *the third time*; he put it *the third time* by;  
(JC 1.2.243)

このようにシェイクスピアが「三度」の反復表現を繰り返したり、あるいは「三度」の反復を表すことば(大抵は副詞である)を用いるのは、どのような意図からか、また何かの影響からであろうか。例えば、彼の文体や思想にまでも多大な影響を与えた聖書の表現はどうであろうか。あるいはギリシャ悲劇やその他古典の影響であろうか。これまでの研究では、「地口(pun)」や「類似音反復(jingle)」<sup>1)</sup>のように意味のあるいは音声学的に反復について言及したものは多々あるが、拙論のように、構造的視点から反復を分析した研究は少ないように思われる。

今回はShakespeareのHamletにおける反復表現を例に取りながら、これらの「三度」の反復表現がはたして実際には、「二度」や「四度(以上)」のものとは比べ、どの程度の頻度で用いられているのかを観察してみたい。テキストにHamletを選ぶ理由は、この作品中のいくつかの有名なせりふが「三度」の反復をともなって書かれており、このことが今回、作品全体での頻度を筆者に調査させるきっかけになったからである。

用例の分類としては、上述のように 1) 同一の単語の反復例、2) フレーズやセンテンスによる反復例、3) 3つの語(句)が反復であるかのように並列されている例、4)

「三度」の意味を表す単語 (thrice, three timesなど) 自体を使用しての表現、の4種類に分類した。4) の「三度」に関しては 1) ～3) の各例と異なり、それ自体が「反復」とはいえないが、聞き手あるいは読者に行為の「反復」を想像させる意味で、参考までに用例を収集してみた。また1回あたりの反復表現の頻度を知るために、各用例をA) 1人の登場人物が1行の台詞中で「反復」を使用している場合、B) 1人が複数行の中で使用している場合、C) 複数の登場人物が1行中でせりふの掛け合いとして使用する場合、D) 複数の登場人物によって複数行において使用されている場合、のように分類した。さらに「三度」の反復表現だけでは、それらが「反復表現」全体の中でどの程度使用されているか、という客観的観察に欠ける恐れがあるため、「二度」および「四度 (以上)」の反復表現についても同様の用例収集と分析を試みた。使用テキストは the Riverside Shakespeare <sup>2)</sup> を、反復用例箇所の提示方については、The Harvard Concordance to Shakespeare <sup>3)</sup> に従う。以下、分類別による各「反復」の分布とその分析結果を示す。

## 1. 「三度」の場合

### 1.1. 同一の単語／語句による「三度」の反復

序1) で示したような一人の登場人物が1行中に使用する“Words, words, word.”の例 (A) は13例、また (B) 複数行において見られる例は40例、(C) 複数の登場人物による反復は5例で、合計58例見られる (表1参照)。作品中最初に登場する例は次のとおり。

8) Horatio. Stay! *Speak, speak, I charge thee speak!* (HAM 1.1.51)

ドラマの冒頭、混乱した場面<sup>4)</sup>で、“speak”が最初の2回 (各1拍ずつ) のあと“I charge thee”という (1拍での朗読が可能な) 語句の後に、3回目が繰り返される (合計4拍) のリズムカルなせりふである。この他、上述の“Words, words, words”をはじめ、Opheliaの問いかけ“How does your honor for this many a day?”に対するHamletの答え“I humbly thank you, *well, well, well*” (HAM 3.1.91) や、“*Lights, lights, lights!*” (HAM 3.2.270) <sup>5)</sup>、などの例が挙げられる。

さらにこの12例は、“Words, words, words”のようなシンプルな反復のパターン (①—②—③: 以下Aパターン) と“*Speak, speak, I charge thee speak!*”のように2度目と3度目の間に接続詞その他の要素がはさまるパターン (①—②—X—③: 以下Bパターン) とに分類できるが、Aパターンが4例、Bパターンが8例見られた。各例の引用箇所については表2を参照。

## 1.2. 異なる語句による「三度」の反復

- 9) Hamlet. What I have done/That might your *nature, honor, and exception*/  
Roughly awake,... (HAM 5.2.231)
- 10) Horatio. *Speak* of it, *stay*, and *speak*! Stop it, Marcellus. (HAM 1.1.138)
- 11) Polonius. Why *day* is *day*, *night* *night*, and *time* is *time*,... (HAM 2.2.88)

異なる語句による反復の例は、(A) 1行に見られる例が13例、複数行に見られる例が7例、合計20例であるが(表1参照)、上の9)、10)、11)の3例にそのパターンが代表される。すなわち10)に見られるように“*Speak... stay... speak!*”のように、反復語がA-B-Aのパターンによって構成される場合と、9)および11)のように“*day... night...time...*”と反復語がA-B-Cのパターンから成立する場合である。Hamletでは13例中、11例までが11)のパターンである。しかも11)では、“*day*”, “*night*”, “*time*”が各々2回ずつ繰り返されながら使用されている複雑な構成の例である。これと同じパターンの例はHAM 3.2.376-382にももう一度見られる。また品詞別では、9)に見られるような i) 名詞による反復：9例、10)、11)に見られるような ii) 文単位による反復：1例、のように分けられる。各例の引用箇所については表2を参照。

## 2. 「二度」の場合

### 2.1. 同一の単語・語句による「二度」の反復

1.の「三度」の反復の場合同様、一人の登場人物が1行中に使用する「二度」の反復表現の例(A)は41例(例12参照)、また(B)複数行において見られる例は14例(例13参照)、(C)複数の登場人物による反復は8例(例14参照)、また複数の登場人物による1行中の例が1例(例15参照)で、合計64例見られる。これら「二度」の反復に用いられる要素には、感嘆詞(例12)であったり、名詞(文の主語など)や文の一部(動詞句や補語)などが見られる。(表1参照) また各例の引用箇所については表2を参照。

- 12) Horatio. *Tush, tush*, 'twill not appear. (HAM 1.1.30)
- 13) King. *My* words fly up, *my* thoughts remain below. (HAM 3.3.97)
- 14) Queen. Hamlet, *thou hast thy father much offended*.  
Hamlet. Mother, *you have my father much offended*. (HAM 3.4.9-10)
- 15) Hamlet. Stay'd it long?

Horatio. While one with moderate haste might tell a hundreth.  
Marcellus and Bernardo. *Longer, longer.* (HAM 1.2.238)

## 2. 異なる語句による「二度」の反復

一人の登場人物が1行中に使用する反復表現の例 (A) は2例 (例16参照)、また一人の登場人物が複数行中に使用する反復表現の例 (B) は1例 (例17参照)、(C) 複数の登場人物による反復は2例 (例18参照) で、合計5例見られる。(表1参照) 各例は以下のとおり。また全例の引用箇所については表2を参照。

16) he keeps them like *an ape, an apple*, in the corner of his jaw... (HAM 4.2.18)

17) Queen. *I hop'd* thou shouldst have been my Hamlet's wife.  
*I thought* thy bride-bed to have deck'd,... (HAM 5.1.244-245)

18) Horatio. *Friends to this ground.*  
Marcellus. *And liegemen to the Dane.* (HAM 1.1.15)

## 3. 「四度 (以上)」の場合

### 3. 1. 同一の単語・語句による「四度 (以上)」の反復

「四度 (以上)」の反復例も今回観察されたが、「三度」や「二度」の場合に比べるとその頻度は少ない。一人の登場人物が1行中に使用する反復表現の例 (A) は3例 (例19参照)、また一人の登場人物が複数行中に使用する反復表現の例 (B) は16例 (例20参照)、(C) 複数の登場人物による反復は1例 (例21参照) で、合計20例見られる。(表1参照) 各例の代表は以下のとおり。また全例の引用箇所については表2を参照。

19) Polonius. I saw him yesterday, *or th' other day, Or then, or then*, with such *or such*,... (HAM 2.1.54-55)

20) Hamlet. *To be, or not to be*, that is the question:  
Whether 'tis nobler in the mind to suffer  
The slings and arrows of outrageous fortune,  
Or to take arms against a sea of troubles,  
And by opposing, end them. *To die, to sleep---*  
No more, and by a sleep to say we end  
The heart-ache and the thousand natural shocks  
That flesh is heir to; 'tis a consummation  
Devoutly to be wish'd. *To die, to sleep---*

*To sleep, perchance to dream---ay, there's the rub,* (HAM 3.1.55-64)

- 21) Hamlet. Do you see *nothing* there?  
 Queen. *Nothing* at all, yet all that is I see.  
 Hamlet. Nor did you *nothing* hear?  
 Queen. No, *nothing* but ourselves. (HAM 3.4.131-133)

例20) はいうまでもなく、有名な第4独白の冒頭から10行くらいの箇所である。1行目の“To be...”と5行目の“To die...,”そして9行目の“To die...”の間隔はちょうど3行ずつあり、等間隔でこの反復が聞こえるように配置されている。この3回の規則性を崩すように、4回目がすぐ3回目のおとに“To sleep,...to dream...”と続き、後半のセリフのリズムを加速させているようにも思われる。また70行目から72行目までの3行では“The oppressor’s wrong,” “the proud man’s contumely,” “the law’s delay,” という異なる語句による反復が続くが、修飾語のパターンが’sによる/...z .../という音の連続で表現されている。さらに中盤以降になると“...calamity of so long life:” (3.1.70) から始まり最後の“...the name of action” (3.1.87) に至るまでに“A of B”のパターンが11回繰り返されていることがわかる。ややもすれば出だしの“To be, or not to be,…”だけに気を奪われがちであるが、全体で30行以上もの長いこの独白を「聴かせる」ための音とリズムの工夫が、前半の不定詞“To ..., to ...”や上述のいくつかのパターン化された語句の規則的な繰り返しにあるといえないだろうか。

### 3.2. 異なる語句による「四度（以上）」の反復

一人の登場人物が1行中に使用する反復表現の例（A）は7例（例22参照）、また一人の登場人物が複数行中に使用する反復表現の例（B）は5例（例23参照）で、合計12例見られる。（表1参照）各例は以下のとおり。また全例の引用箇所については表2を参照。

22) Hamlet. Still I have *cause, and will, and strength, and means...* (HAM 4.5.45)

23) Polonius. *Be thou familiar, but by no means vulgar:*  
 Those friends thou hast, and their adoption tried,  
*Grapple* them unto thy soul with hoops of steel,  
 But do not dull thy palm with entertainment  
 Of each new-hatch’d, unfledg’d courage. *Beware*  
 Of entrance to a quarrel, *but* being in,  
 Bear’t that th’ opposed may beware of thee.  
*Give* every man thy ear, *but* few thy voice,

*Take each man's censure, but reserve thy judgment.  
Costly thy habit as thy purse can buy,  
But not express'd in fancy, rich, not gaudy...* (HAM 1.3.61-71)

例23) は、1幕3場において、船出する息子Laertesに父親Poloniusが説教する場面であるが、ここでも “Be thou familiar, but...” のように「命令文+but...」のパターンが6回くり返されている。

#### 4. 反復を表現した数詞および副詞

##### 4.1. 「二」を表現する数詞および副詞

The Harvard Concordanceによると、次の「二」を表現する数詞および副詞の頻度は以下のとおりである。(カッコ内は全作品中における頻度) second: 9回(103回)、twice: 4回(74回)、two: 20(639回)、合計で33回(816回)。(ただしsecondとtwoについては「2度(回)」と「2つの(dual number)」の区別をしていない。)各用例箇所については表2を参照。

##### 4.2. 「三」を表現する数詞および副詞

4.1.同様に、「三」を表現する数詞および副詞は、third: 3回(70回)、three: 7回(354回)、thrice: 4回(64回)、合計で14回(488回)。各用例箇所については表2を参照。

このように数詞および副詞によって表される「二(度)」と「三(度)」を比較すると、「二」の方が圧倒的に頻度が高いことがわかる。ちなみに “once” に関しては19回(455回)で、これも「三度」より多く使用されていることがわかる。各用例箇所についてはコンコーダンスを参照。

#### まとめ

これまで観察してきたHamletにおける「二度」、「三度」、「四度(以上)」の各反復表現について簡単にまとめるならば、次のとおりである。

- 1) 同一語句による反復表現は“A<sub>1</sub>-A<sub>2</sub>」「二度」の表現の方が“A<sub>1</sub>-A<sub>2</sub>-A<sub>3</sub>」のような「三度」よりも若干多い。(64例:58例)
- 2) 異なる語句による反復表現は“A-B-C”のように「三度」の方が“A-B”のような「二度」の表現よりも多い。(20例:5例)
- 3) 「四度(以上)」の反復表現も同一語による表現は「二度」「三度」に比べると少ないが異なる語句による反復(12例)については「三度」(20例)について多く

使用されている。「二度」：5例)

- 4) 同一語句による反復は「二度」の方が「三度」より多く使用されているが、異なる語句による反復表現も合わせてみた場合には「三度」の方が「二度」よりも多いことがわかる。(78例：69例)
- 5) 同一語句による「二度」の反復表現は、1行中に用いられる方が複数行中で用いられるよりも多い。(41例：14例)
- 6) 逆に同一語句による「三度」の反復表現は、1行中に用いられる例よりも複数行中で用いられる例の方が多い。(40例：13例) 「四度(以上)」の場合についても同様。(16例：3例)
- 7) これらの反復表現の多くは複数の登場人物によってよりは、一人の登場人物によって語られる例に分布が集中している。しかもセリフの長さに伴い、一行の中でというよりも複数行の中で用いられる場合が多い。(表1参照)
- 8) これらの反復表現の多くは、散文よりも韻文において多く見られる。<sup>6)</sup> これは「三度」や「四度」の反復が、無韻詩 (blank verse) の中で意図的に用いられることにより、単に弱強五歩格 (iambic pentameter) のリズムを調整するためだけでなく、数行からときには数十行に及ぶ長ぜりふを、パターン化した反復を用いることにより、観客に飽きることなく聴かせるという、Shakespeareの隠された意図もしくは計算があるように思われる。

今回はHamlet一作品に限定しての調査であり、Shakespeare全作品中での傾向を知る必要があろう。また今回の調査を基礎として、Shakespeareに影響を与えたと考えられる聖書における同様の反復表現についての調査も不可欠である。コンコーダンスによると<sup>7)</sup>、「三度(三つの)」は、“three”(three+n)：423回、“third”(third+nを含む)：53回、“thrice”：14回、合計で490回に対して、「二度(二つの)」は“twice”：17回、“two”(+n)：524、“two”(+n)：524回の使用例があることが確認された。余談ながら、聖書については興味深いことに、その多くの登場人物が、メトシェラ：969歳、アダム：930歳、セト：912歳、イサク：180歳、ヤコブ：147歳、モーセ：120歳などのように「三」の倍数の寿命を生きたとある。このように“three score and ten”や「三位一体」、「三博士」を始めとして「三」の表現には事欠かない。これらのデータ・事実も含め、さらに詳細な調査研究は次回以降の課題としたい。



シェイクスピアの作品における反復表現についての一考察  
 ～シェイクスピアは「三度」がお好き?!～

表1 Hamletにおける反復表現：各パターンにおける頻度および分布 (p: prose)

	2度の反復表現		3度の反復表現		4度以上の反復表現	
	同一語句	異なる語句	同一語句	異なる語句	同一語句	異なる語句
1人／1行中	42 (5p)	2 (2p)	13 (1p)	13 (3p)	3 (0p)	7 (2p)
1人／複数行中	14 (5p)	0	40 (9p)	7 (3p)	16 (6p)	5 (0p)
複数／1行中	1 (0p)	1 (0p)	0	0	0	0
複数／複数行	8 (7p)	1 (0p)	5 (3p)	0	1 (0p)	0
合計	64 (17p)	5	58 (13p)	20 (6p)	20 (6p)	12 (2p)
反復を表現した語	33 (0p)	0	14 (5p)	0	0	0

表2 Hamletにおける反復表現：各パターンの使用箇所

	2度の反復表現		3度の反復表現		4度以上の反復表現	
	同一語句	異なる語句	同一語句	異なる語句	同一語句	異なる語句
1人／1行中	1.1.30; 1.2.132; 1.2.135; 1.2.180; 1.2.184; 1.2.236; 1.2.238 1.3.33; 1.3.53; 1.5.108; 1.5.182; 2.1.72; 2.1.44; 2.1.46; 2.2.393; 2.2.449; 3.1.102; 3.1.161; 3.2.203; 3.2.249; 3.3.9; 3.3.97; 3.4.125; 4.3.26; 4.7.34; 4.7.37; 4.7.80; 4.7.106 4.7.184; 5.1.85p; 5.1.94; 5.1.210p; 5.1.210p; 5.1.243; 5.1.264; 5.1.281;	4.2.18p; 5.1.108p;	1.1.51; 1.5.22; 1.5.80; 1.5.91; 1.5.106; 2.2.192p; 3.1.91; 3.2.73; 3.2.270; 3.3.55; 4.5.166; 5.1.12	1.1.138; 1.4.57; 2.2.88; 2.2.89; 3.4.189; 3.4.190 4.5.159; 4.7.121; 5.1.30p; 5.1.51p; 5.2.150p; 5.2.231	2.1.54-55; 5.1.275; 5.2.301-310	4.4.45; 4.5.11; 4.7.8; 4.7.169; 5.1.99-100p; 5.1.104-108p; 5.2.52;

	5.2.286p; 5.2.313; 5.2.320; 5.2.323p					
1人／複数行中	3.1.31-32; 3.1.193-194; 3.2.291-295; 3.4.9-11; 3.4.88-94; 3.4.96-102; 4.3.9-10; 4.3.27-28p; 4.5.29-30; 4.7.136-137; 5.1.15-16p; 5.1.16-19p; 5.1.84-85p; 5.1.223-225p	5.1.244-245;	1.1.71-75; 1.1.128-135; 1.1.162-163; 1.2.11-12; 1.2.18-20; 1.2.25-26; 1.2.106-109; 1.5.129-130; 1.5.149-161; 2.1.85-86; 2.2.97-98; 2.2.111-112; 2.2.116-119; 2.2.131-139; 2.2.197-199p; 2.2.215-216p; 2.2.272-273p; 2.2.284-286p; 2.2.594-597; 3.1.169-171; 3.1.145-146; 3.1.182-185; 3.2.198-199; 3.3.67-68; 3.3.69-71; 3.3.73-74; 3.4.15-16; 3.4.78-79; 3.4.197-198; 4.5.72-72; 4.5.107-109; 4.5.171-172p; 4.5.208-209; 5.1.122-127p; 5.1.122-125p; 5.1.208-209p; 5.2.39-41; 5.2.220-222p; 5.2.381-383	1.2.29-31; 3.2.350-356p; 3.4.197-198 5.1.12; 5.1.130-134p; 5.1.231; 5.2.276-277	1.2.78-81; 1.2.88-90; 1.2.101-102; 1.5.99-102; 2.2.304-306p; 2.2.319-325p; 3.1.55-64; 3.1.69-72 3.1.83-87 3.1.151-154; 3.2.364-366p; 4.1.12-14p; 4.5.72-73p; 5.1.189-190p; 5.1.192-194p; 5.2.233-239	1.3.17-18; 1.3.61-71; 1.4.44-45; 1.5.16-18; 2.2.581
複数／1行中	1.2.238	1.1. 15;				
複数／複数行	1.2.186-187; 2.2.33-34; 2.2.404-405; 3.4.29-30; 4.3.17-18; 4.3.46; 4.7.106-107; 5.1.236	3.2.104-105p	1.1.164-165; 1.3.10; 1.5.25-27; 2.2.241-243p; 3.2.376-382p; 4.3.18-19p.		3.4.131-133	

反復を表現した語	second: 9 (103) 1.3.54; 2.2.384; 3.2.179; 3.2.180; 3.2.182; 3.2.184; 3.2.214; 4.7.153; 5.2.268  twice: 4 (74) two: 20 (639) 1.1.25; 1.1.33; 1.1.65; 2.196,etc.		third: 3 (70) 1.2.208; 5.2.269; 5.2.297.  three: 7 (354) 2.1.10; 2.1.73 5.1.11p; 5.1.139p; 5.2.150p; 5.2.162p; 5.2.167p;  thrice: 4 (64) 1.2.202; 2.1.90; 3.2.258; 3.2.258;			
合計	33(836)		14(488)			

シェイクスピアの作品における反復表現についての一考察  
～シェイクスピアは「三度」がお好き?!～

**NOTE**

- 1) 「地口 (pun)」や「類似音反復 (jingle)」については、各々Brookの*The Language of Shakespeare*やSchelerの*Shakespeares Englisch*, 荒木・中尾「シェイクスピアの発音と文法」等を参照。
- 2) *The Riverside Shakespeare* by G. Blakemore Evans.
- 3) *The Harvard Concordance to Shakespeare* by Marvin Spevack.
- 4) 突然、亡霊がホレイショや見張りの兵士らの前に現れ、それをホレイショが必死になって止めようとする緊迫した場面である。
- 5) 劇中劇の最中に立ち上がった国王を見てPoloniusが叫ぶシーンで用いられている反復表現である。
- 6) 文末の表1および表2を参照。
- 7) *Young's Analytical Concordance to the Bible*.

**参考文献**

- The Riverside Shakespeare*. Houghton Mifflin, Boston, 1974  
*The New Shakespeare Hamlet* edit. by John Dover Wilson. Cambridge University Press, 1936  
Marvin Spevack, *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Georg Olms Verlag Hildesheim, 1973  
Alexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*, 2vols. Dover Publications, New York, 1971  
G. L. Brook, *The Language of Shakespeare*. (『シェイクスピアの英語』三輪伸春ほか訳・松柏社 1998)  
Manfred Scheler, *Shakespeares Englisch: Eine sprachwissenschaftliche Einführung*. (『シェイクスピアの英語一言葉から入るシェイクスピア』岩崎春雄・宮下啓三訳 英潮社新社 1982)  
Robert Young, *Young's Analytical Concordance to the Bible*. Hendrickson, USA.  
『口語訳聖書コンコルダンス』(新教出版社, 1978年)  
『シェイクスピアの発音と文法』荒木一雄・中尾祐治著 荒竹出版 1980.

(本学教授)